

---

# 似た者同士

りょく

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

似た者同士

### 【著者名】

りょく

N 8 9 8 4 P

### 【あらすじ】

鋼の鍊金術師ロイエドです。

ヒューズ中佐の訃報が届くという展開です。

シリアルストーリーなので甘が好きな方はご注意ください。  
キス程度の表現があります。

かなり鋼の初期に書いたものなので設定など変わって（変わってるのか？）いる所があればすみません。スルーしてください。

## 上 似た者

「そんな・・・中尉！嘘ですよね！？・・ヒューズ中佐が・・・  
アルが必死にホークアイ中尉に問いただす。けれど・・・中尉の答  
えは変わらない・・・。

「・・・ヒューズ中佐が死んだなんて」

「俺は何も言えなかつた・・・。

いや・・何も考えられなかつた・・・。

頭ん中、真っ白で・・・。

「兄さん？・・・大丈夫？」

「エドワード君、ちょっと顔色が悪いみたいね・・」口で少し休  
んだら？」

「すみません・・兄さん、ちょっと休んでいこ」

アルと中尉が心配そうに気を使ってくれる。通された部屋にあつた  
ベットに座り、何度も同じ事を頭の中で繰り返す。

「ヒューズ中佐が・・死んだ？・・・ヒューズ中佐が・・・・

何とか、その事を理解出来た頃には窓の外の太陽は地平線の上にい  
た。

「アル？」

部屋を見わたしてもアルの姿は無かつたが、代わりに机の上に紙が置いてある。

『 兄さんへ

一緒に行つた方が良かつたのかもしれないけど、

先にホークアイ中尉と一緒にヒューズ中佐のお墓に行つてくる

ね』

一先ずアルの居場所が解りほつと息を吐く。それから次に行う自分の行動を考えるが・・・。

「もうすぐ日も暮れるし・・今から図書館行つてもな・・

どうしようつかとベットの上で悩んでいると、部屋の扉を叩く音が聞こえた。

「はい?」

誰だ?と思いながら扉を開けようとするとエドよりも早く、扉の向こうにいる人物が先に喋り出した。

「鋼の、頼んでおいた報告書は明日持つてくれ

「!!」

その声を聞くと、エドは扉に手をかけたまま固まってしまう。足音が遠ざかっていくと、はじけるように扉を開いたがすでに姿は無かつた。

「あら? エド君

「兄さん、調子どう? ?

ちょうどその時、中尉とアルが帰つて來た。

「顔色は少し良くなつたみたいね・・・今日はソロで休んでもらつても構わないから、それじゃ私は行くわね」

「・・・中尉・・その書類、何処に持つていいくの?」

「兄さん?」

アルは不思議そうだが、中尉は顔から微笑みが消え、いつものクールな顔になつた。

「大佐の所よ」

「それ、俺が持つて行つてもいい?」

「・・・・ええ」

そう言つと中尉は手に持つていた書類を工ドに渡す。

「アル、先に休んでいてくれ」

「う・・うん」

「Hドワード君、大佐の事・・・いえ何でも無いわ」

いつの間にか日は落ちて、月が明々と空を照らしている。

廊下や他の部屋からは人の気配はしない。

その静寂と、闇の中をHドは迷わず歩いていく。

カツン・・カツンと自分の歩くたびに靴の音が響く。

「・・・・・」

静かに深呼吸をしてある一つの扉の前に立ち止まり、ノックする。

「誰だね?」

聞き慣れた声が扉の向こうから聞こえる・・。

「・・・大佐」

「鋼・・・か、何の用だね?」

扉をゆっくり開けると電気も付けず、月明かりが差し込む窓辺のいつももの席にロイはいた。

「中尉から・・書類を預かつてきた」

「そうか」

「・・・・・大佐」

「何だね?」

「ヒューズ中佐が死んだつて・・今日・・知つたよ

「そうか」

淡々とした答えしか言わない大佐に少し胸が痛くなる。

「どうして教えてくれなかつたんだよ!-?」

「君に教えてどうなると言うのだね?これは我々軍の問題だ・・」

「・・・何にも出来なくても・・何も出来なくとも…」

「ダン！…と片手で机を叩き大佐の顔を睨む。

「・・・大佐、ヒューズ中佐が死んで悲しい？辛い？」

ロイは答えなかつた、ただ窓の向こうで輝く月を眺めるだけで…。

「大佐！」

「君は私を怒らせたいのか？」

エドの方を振り向いたロイの顔は見た事も無い表情だつた。

虚無にも似た表情・・・。

その時初めてエドは気づいた・・ロイは誰よりもヒューズ中佐が死んだ事に・・悲しみ・・辛く・・怒つているつと・・。

痛いほどのロイの感情を知り、エドはロイの目をじっと見る。

「・・・初めて君達兄弟の気持ちが解つたよ・・」

それは人体練成の事・・世の断りを破り禁忌を犯す・・。

「大佐・・」

「大丈夫だ、私は君達とは違う・・書類は預かる、さあ行きなさい」  
ロイがエドが持つてゐる書類へ手を伸ばそうとしたが、途中で手を止める。

「鋼の・・泣いているのか？」

悲しいや寂しいつという感情があつたのも確か・・けれど、今流れる涙は目の前にいる不器用な人へだつた。

「大佐・・俺はヒューズ中佐が死んで悲しいよ・・それにあんたが泣いているのも同じ様に・・・」

エドの言葉は途中で遮られた・・ロイがエドの体を抱きしめたからだ。

手に持つていた書類が音を立てて床に落ちる。

「どうして君は・・・」

自分を抱きしめるロイの体が震えている事が解る。エドはただロイの体を抱き始めた。

「鋼の・・・」

痛いほど抱きしめられた後、口を塞がれる。

「大・・佐・・・」

初めての行為にエドは必死に答える。段々と熱いキスに膝が立たなくなつてくると、冷たい床に押し倒される格好になるが、それでもロイはキスを続ける。

朦朧としてくる意識の中、ロイの手が自分の服を脱がせ、肌に直接触つてくるのを感じる。

冷たい手が肌に触れると、体が震える。それが冷たさかまた違う感覚からなのか今の自分には解らなかつた。

鋼の手と足が床にぶつかりガシャっと音をたてる。

「はが・・・・・Hド」

大佐が自分の名を呼ぶ・・その言葉に鼓動が波打つ。ロイの行為によつてもたらされる熱に翻弄されながら、エドも必死にロイの名を呼ぶ。

「ロイ・・・ロイ・・・」

手を伸ばし彼を捕まえているのに・・・。

彼が自分の名を呼ぶ声が聞こえるのに・・・。

不安が消えない・・・。

「・・・ロイ」

今、彼が見ているのは誰なのだろう・・・。

俺？・・・それともヒューズ中佐？・・・・・。

「エド・・・」

激しい情緒にいつの間にかエドは気を失っていた。記憶が途切れる

まで、エドはロイを抱きしめ・・彼の名を呼び続けた。

「ロイ・・・・・・・・・・・・・・・・・・

>>>Next

## 下 似た者

窓から差し込む日の光に、目を覚ます。

「起きたか？」

声がする方へ向くと、軍服では無い私服のロイがいた。

「・・ここは？」

「私の家だ」

ロイの家へ来たのはもちろん初めてだ。部屋の中に物は余り無く、がらんとしたイメージがあるが、本や書類などがあつちこちに散らばっている。

「何か飲むかね？」

「あ・・ああ・・」

エドは手渡された、入れたての「コーヒーを見つめていると少しの沈黙の後、ロイが口を開く。

「中尉にはヒューズが逝った後、すぐに連絡をと言われたんだが・出来なかつた」

机の上に飾られた、まだ若いロイとヒューズ中佐の写真。

「君に言つてしまつと、本当にヒューズが死んだ事を認めてしまつ事になるような気がしてな・・まつたく自分でも私らしくないと思うよ」

ロイは苦笑交じりで喋る。

「ロ・・大佐は・・ヒューズ中佐の事・・・・・」

エドが言いかけた言葉はロイによつて遮られる。

「そろそろ出勤の時間だ、君はココでゆっくりしていいってもいい」手早く軍服に着替えたロイは、いつもの顔を作り扉に手をかける。

「私はヒューズを友と思つていたよ・・大切な者の一つだ・・・」

「・・・・・」

扉に手をかけたハズのロイが、エドの所まで戻つてくると・・・。

「エド・・君も・・いや、もっとも大切なのだ・・ぐれぐれも無茶

はせぬようにしてくれよ?」「

軽く額にキスをするとロイは出て行った。

「・・・・・」

キスされた額を手で押さえ、しばらく放心していたエドだったが、ベットから出ると飾られた写真を見る。

「中佐・・あんたが守ろうとしてた人・・俺が守るよ・・・」

「あ～兄さん!何処行つてたんだよ～!～!」

「悪い!」

謝りながら走つてアルと中尉の所へ駆け寄る。

「エドワード君」

「これ大佐に報告書渡しておいて・・・中尉、ありがとう」「

ホークアイ中尉は少し表情を緩めて、自分の仕事場へと向かつた。

中尉もまた自ら信じた事、信じた人の為に・・・。

そして俺達は自分達の体を元に戻すために、賢者の石を探す旅に戻る・・。

「兄ちゃん!早く乗り遅れるよー!」

「わかつてるつて!」

急かすアルに駆け寄りながら、少し来た道を振り返りエドは呟く。

「・・・またな皆・・・」

>>>END

下 似た者（後書き）

短編でした。

ヒューズ中佐の話は悲しかつたですが、それを取り巻く人の話を少しだけ書きたくてこんな感じになりました。

なんか？の方がかなり短いのですが・・短編にすると長すぎるのうつな気がして（汗）

こちらも感想等お待ちしています。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8984p/>

---

似た者同士

2011年1月9日03時29分発行